

明治期「切附本」小考

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 伊藤 美幸

要旨

造本様式の変遷という観点から見た場合、切附本は中本型読本の末流に位置づけられ、明治期草双紙の版面様式を先取りした作品群とされる。そのため、従来、明治期草双紙の出現以前の切附本を対象として研究されることが多かった。ところが、明治期に出版された草双紙類の巻末広告をみると、地本問屋の商品のなかに「切附本」や「切附物」、或いは「切附」と称される出版物が多数確認される。切附本を通して幕末・明治期の移行期の様相を明らかにするためには、こうした明治期の巻末広告にみられる「切附」という語について検討する必要があると考える。

そこで本稿では、明治期における「切附本」という語について検討し、具体的にどのような出版物を指していたのかを明らかにする。まず、明治十（一八七七）年頃の巻末広告を版元別に整理した結果、地本問屋の共通認識として、木版・銅版・活版などといった印刷手法を問わず、切附表紙をもつ都々逸や端唄等の音曲関連書、並びに実録種の安価な草紙類を指して「切附本」と呼称することが確認された。特に、「切附」という語が一代記・敵討・実録のような言葉とともに使用されていることは注目に値し、実録の筋を紹介する安価な読み物という点で、切附本のなかに幕末・明治の両時代をまたぐ共通点を見出せると考える。

また、用例と実物とを照合させると、明治期の切附本は上下巻二冊読切で全丁絵入り、一冊の丁数は九丁及び十丁を基本とし、鮮やかな赤や紫色が目立つ摺附表紙（切附表紙）であることがわかる。形態的な特徴を考慮すれば、明治期の切附本は「草双紙」、或いは「合巻」と呼ぶべき一群である。しかし、当時の浮世絵師の証言をみると、近世の流れを汲む合巻（草双紙）と明治期の切附本とは、絵の重要度で異なる商品であると認識している。明治二十年以降に関しては、明治十年代と比べて広告などに「切附本」という語を掲げるものが顕著に減っているため、主に当時の回想記から用例を検討した。雑誌や講談本の隆盛に伴って、洋装複製本を意味する名称として切附本が認識されており、「切附本」の語義が拡大した可能性を指摘できる。

明治期の切附本はジャンルを形成しうる数量と特徴を有する。今後は、明治期の草双紙全般を対象として、合巻と切附本との認識的な差違を検討する必要があると考える。

キーワード：切附本 切附表紙 草双紙 明治時代 地本問屋 実録

A Brief Study on *Kiritsukebon* in the Meiji Era

ITO Miyuki

Department of Japanese Literature,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

In the context of changes in bookbinding styles, *kiritsukebon* is positioned at the end of the *yomihon* style of the *chūhon* format, and it is considered to be ahead of the *kusazōshi* format published in the Meiji era. In general, *kiritsukebon* before the appearance of *kusazōshi* published in the Meiji era is often analyzed, but the words *kiritsuke*, *kiritsukebon*, and *kiritsuke-mono* appear frequently in advertisements for books such as *kusazōshi* published in the Meiji era. It is considered to be necessary to examine the word *kiritsukebon* in detail to clarify the aspect of publishing culture from the end of the Edo period to the Meiji era. This paper analyzes the word *kiritsukebon* in the Meiji period, and clarifies what publications were being referred to.

A survey of the term *kiritsukebon* in advertisements around 1877–1887 confirmed that publishers commonly referred to *kiritsukebon* as inexpensive books with *kiritsuke* covers (flush covers) whose content were *jitsuroku* (historical stories) and the popular songbooks called *hauta* and *dodoitsu*. In particular, the word *kiritsuke* is used in conjunction with words such as *ichidaiki* (biography), *katakiuchi* (revenge stories), and *jitsuroku*. In terms of inexpensive books that introduce *jitsuroku* storylines, *kiritsukebon* has a commonality that connects the end of the Edo period to the Meiji era.

Bibliographic research confirmed that *kiritsukebon* in the Meiji era were in principle two-volume complete stories, with each volume nine to ten pages, and a *kiritsuke* cover with a multicolor woodblock print, particularly those using bright red and purple colors. Considering the characteristics of their bookbinding and format, the *kiritsukebon* published in the Meiji period should be referred to as the style of *kusazōshi* or *gōkan*. However, according to *ukiyo-e* painters, the *kusazōshi* published from the early modern period and the *kiritsukebon* of the Meiji era are different works considering the importance of the illustrations.

Around 1887, when the old publishing system began to change, the word *kiritsukebon* was no longer used in advertisements compared to the early Meiji period. Therefore, the author attempted to examine usage examples mainly from recollections of the time. With the popularity of magazines and *kodanbon*, it was confirmed that people recognized *kiritsukebon* as a type of Western-style temporary bookbinding. *kiritsukebon* of the Meiji period has the quantity and characteristics to form a genre. In the future, it is necessary to examine the difference between *gōkan* and *kiritsukebon* for *kusazōshi* published in the Meiji era.

Key words: *kiritsukebon*, flush cover, *kusazōshi*, Meiji era, publisher, *jitsuroku*

はじめに

- 一. 卷末広告にみる「切附」の用例
- 二. 形態的特徴
- 三. 明治二十年以降の「切附」という語の広がり
おわりに

はじめに

天保の改革後、実録物の規制緩和に連動して出版されたという「切附本」は⁽¹⁾、その名の通り切附表紙（表紙の四周のうち、いずれか三方を裁ち落とした簡易的な製本法）⁽²⁾に由来する名称であり、書型は中本、合巻風の摺附表紙を備え、読本と合巻とを取り合わせたような版面様式を持つ。嘉永・安政期頃の鈍亭魯文の著述活動を回想した野崎左文によれば、「其頃切付本大に流行し其作者は魯文に限るやう書林仲間吹聴せられし」という状況で、当時の切附本の中心的な担い手は魯文であったという⁽³⁾。そして、魯文が切附本の制作から手を引いた明治期においても引き続き出版された。切附本は中本型読本や草双紙をはじめとする中本の出版物とも関わりつつ、幕末・明治という時代の移行期において、人々の関心と需要を継続的に引き出していたという点で注目される出版物である。

しかし、これまでの切附本研究では明治期の切附本についてほとんど言及されてこなかった。造本様式の変遷から見た場合、切附本は中本型読本の末流に位置づけられ、明治期草双紙（合巻）の様式を先取りした作品群であるとされる⁽⁴⁾。見開きで本文と挿絵の版面が交互に配される様式を基本としつつ、切附本の一部には明治期の草双紙（合巻）のよ⁽⁵⁾うな、漢字仮名交じりの本文が挿絵の周囲に書かれた版面をも含み、「挿絵の周囲に平仮名だけで綴られた合巻とは、異なるコンセプト」⁽⁶⁾で

あったことは確かである。そのため、明治期草双紙の様式の先取りとされる切附本は、明治期の草双紙（合巻）⁽⁷⁾が出現する明治十一（一八七八）年⁽⁸⁾を境に、中本型読本の末流としての様式的展開に一応の区切りをつけたかたちとなる。高木元氏作成の「切附本書目年表稿」が嘉永・安政期〜明治五（一八四八〜一八七二）年頃までの切附本を扱っているのもこうした理由からであろう。

明治期に出版された草双紙類の卷末広告や蔵版目録をみると、地本問屋の商品のなかに「切附本」や「切附物」、或いは「切附」と称される出版物が多数確認される。切附本を通して幕末・明治期の移行期の様相を明らかにするためには、こうした明治期の卷末広告にみられる「切附本」という語について当時に即して用例を検討する必要があると考えられる。また、切附表紙は作業が簡単で安い価格で製作・販売ができたことから、消耗品としての性格が強い地本類に多く用いられていた。したがって広告類にみられる「切附」という語には、切附表紙で仕立てられたさまざまな内容の出版物が含まれていることが予想される。

そこで本稿では、明治十〜二十（一八七七〜一八八七）年頃の地本問屋の卷末広告や蔵版目録に類出する「切附本」という語について用例を検討し、具体的にどのような商品を指しているのかを明らかにする。また、明治二十年以降に関しては、明治十年代と比べて広告などに「切附本」という語を掲げるものが顕著に減っているため用例の確認が難しい。広告に代わって主に当時の回想や証言から用例を取り上げること、出版機構の変化にもなって「切附本」の語義が拡大した可能性を指摘したい。明治期の切附本を研究することは、「切附本」というジャンルの問題にとどまらず、ひいては草双紙との関係性を改めて見直すことになる点で不可欠な研究であると考える。なお、卷末広告をみると「切附」「切附物」「切附本」等の呼び方が確認されるが、ここではそれぞれの呼び方の厳密な違いを問題としないこととする。

一・巻末広告にみる「切附」の用例

まず、明治十〜二十（一八七七〜一八八七）年頃の草双紙類に付されている地本問屋の巻末広告及び蔵版目録を版元別に整理し、「切附」という言葉の用例を確認する。広告等の翻刻に際しては、旧字・異体字を可能な限りそのまま用い、引用文中の下線は私に付した。

ここで取り上げる（ア）〜（コ）の版元は、すべて地本を扱う本屋であり、（ア）杉浦朝次郎、（ウ）辻岡文助、（エ）大西庄之助、（カ）小林鉄次郎は安政期以降に切附本を出版していた版元である。一方、（イ）綱島亀吉、（オ）堤吉兵衛、（キ）宮田伊助、（ク）沢久次郎、（ケ）長谷川園吉、（コ）森本順三郎は明治元年以降に切附本を出版した本屋であり、明治期の新興書肆が多い。

（ア）杉浦朝次郎

『岩見重太郎一代記』（架蔵） 付載広告〔図1〕では、「御手本往来物／新板 いろはかるた／流行錦繪類品々／切附一代記本品々／案文書翰袋／都々一葉唄るゐ／彩色小本類品々／武者切附本品々／歳々改正 年數早見／横本ど、いつはうた 大津繪類品々」とある。傍線部に注目すると、「切附一代記本品々」「武者切附本品々」とあり、一代記物と武者物とに「切附」と冠している。なお、上段三列目「流行錦繪類品々」と五列目「案文書翰袋」を、それぞれ「傍訓小學讀本」「御布告いろは節用 全二冊」とする版も確認される。

この他に、『開化勸農往来』（国立国会図書館蔵（特58971））付載広告では、「畫分姓名字引 全／御布告いろは節用 全／繪本短書用文全／開化作文階梯 全／いろはかるた品々／色入小本類品々／武者繪本類品々／敵討一代記繪本類」のように、武者物や一代記物の「繪本類」を紹介するものがある。題材の傾向から推測すると、「武者切附本」などと同様の書であった可能性が高い。

（イ）綱島亀吉

続いて、綱島亀吉の巻末広告である。『幻阿竹噂之聞書』二編下巻（国立国会図書館蔵（特52-920））付載広告では、「芳川春濤閣 岡本起泉作 幻阿竹噂聞書三編／川上行義復讐新話二編／澤村田之助曙草紙五編／坂東彦三倭一流三編／白菖阿繁願末三編／島田一郎梅雨日記五編／其名高橋毒婦小傳七編／御所櫻梅松録十五編マデ／名所細見東京新圖／武者切附本品々／新形折本品々／石摺略曆品々」とあり、上段に芳川春濤閣・岡本起泉作の草双紙（明治十二〜十三（一八七九〜一八八〇）年頃）を列挙し、下段三列目に「武者切附本品々」が確認できる。

また、磯部敦氏が指摘するように、綱島亀吉版『絵本小説三莊大夫』（国文学研究資料館蔵（ナ1415））の巻末広告〔図2〕には「新形袋入銅板本／同銅版切付本類／木版切付本類／新板色入小本／…」とあり、先行する木版切附本を銅版でリメイクした銅版切附本の存在が知られる⁽⁶⁾。銅版切附本とは銅版草双紙のことであり、綱島亀吉は明治十八

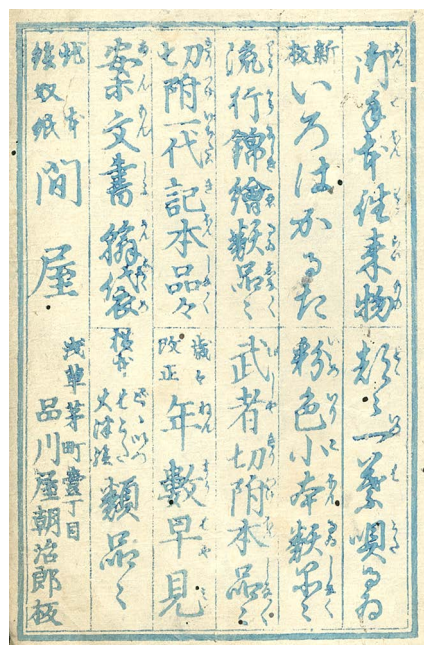


図1 品川屋杉浦朝次郎版『岩見重太郎一代記』付載広告（架蔵）



図2 綱島亀吉版『繪本小説／三莊太夫』付載広告
(国文学研究資料館蔵 (ナ4474))

二十(一八八五～一八八七)年頃に、武者・一代記物の絵本を銅版で出版している。このように、銅版や木版という印刷技法の差違を超えて切附本とすることが確認される。木版のみならず銅版・活版の切附本を巻末に掲げるものは綱島亀吉だけではない。次に取り上げる辻岡文助も同様である。

(ウ) 辻岡文助

『清正一代記』下巻(白石市図書館蔵(466))付載広告(図3)には、「一 新板三冊袋入 讀切物 六十番／一 合本三冊四冊五冊 袋入 讀切物 十二番／中本用文字引 算法其他品々／一 切付上下一代記 実録物るゐ 百番」とあり、上下巻二冊で完結する実録題材の小冊子であることを掲げている。また同様に、『頼光一代記』後編(国文学研究資料館蔵(鈴木本))付載広告には、下段五行目に「切付一代記真録武者其他一冊物

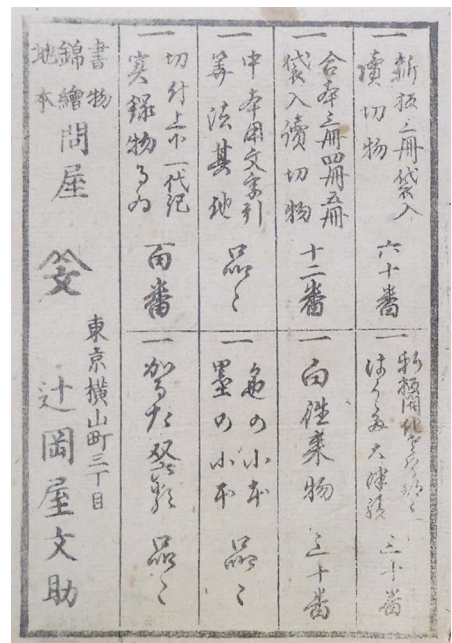


図3 辻岡屋文助版『清正一代記』下巻付載広告
(白石市図書館蔵 (466))

数百番」とあり、一代記・真録(実録)・武者物をはじめとする一冊読み切りの小冊子が紹介されている。

『新撰浮世都々逸』(立命館大学アート・リサーチセンター蔵(arcBK03-0386))付載広告(図4)では、「一 活版實録洋綴同袋人物類 百番／一 新刻銅版小本 活版切附物 五十番／一 新版三冊袋入 讀切物るゐ 七拾番／一 切付上下一代記實録物るゐ 百番／…」とあり、上下巻二冊の切附本に加え、綱島亀吉の広告にもみられたように「活版切附物」が紹介されている。注目されるのはその品揃えであり、「新刻銅版小本活版切附物」は五十番(種類)、「切付上下一代記實録物るゐ」は百番(種類) 程度の豊富な品揃えであったことを伝えている。

(エ) 大西庄之助

『小夜砧宇都谷峠』(国立国会図書館蔵(特2979))付載広告(図5)

の最終行に「一代記切付物しなく」とあるように、大西庄之助も一代記物の切附本を出版しているが、次のような例もある。『絵本太閤記』（白石市図書館蔵（461））付載広告（図6）には、「開化獨案文全一冊／繪本徳川軍記全十二冊／繪本甲越軍記全十冊／近世美名傳品々／新板葉うた大津ゑど、一切附品々／新板一代記切附品々／…」とある。『絵本徳川軍記』『絵本甲越軍記』といった軍記物は、「新板一代記切附品々」とは別に立項しているが、後述するようにここで挙げられている絵本の版面は、漢字仮名交じりの本文が挿絵の周りを取り囲むように書かれているものであるから、こうした版面は明治期の絵本・草双紙類と共通する特徴であることから、切附本周辺の出版物といえる。また、広告では端唄や大津絵節、都々逸といった音曲関連の冊子を切附本としており、表紙の形態的特徴から「切附」と冠していると推測される。

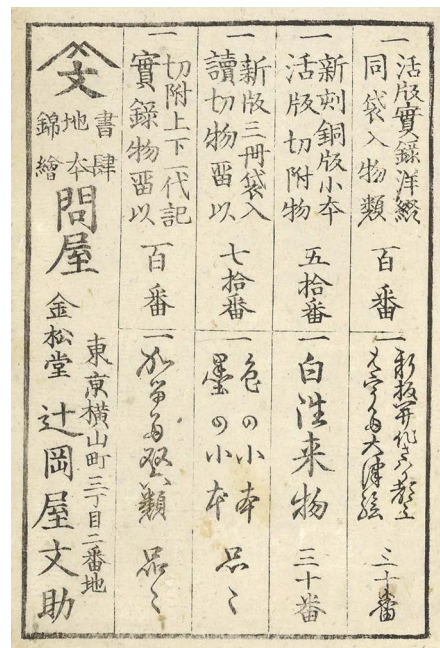


図4 辻岡屋文助版『新撰浮世都々逸』付載広告
 (立命館大学アート・リサーチセンター蔵
 (arcBK03-0386))

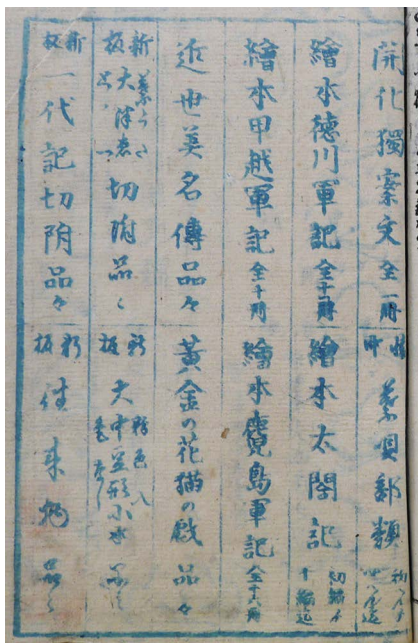


図6 伊勢屋大西庄之助版『絵本太閤記』付載広告
 (白石市図書館蔵 (461))

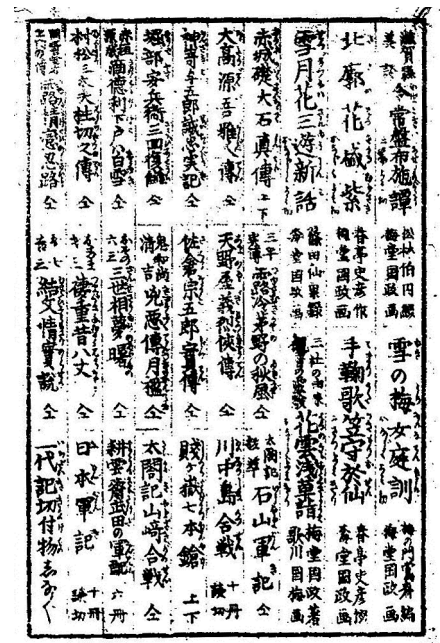


図5 伊勢屋大西庄之助版『小夜砧宇都谷峠』
 付載広告 (国立国会図書館蔵 (特 42-879))

(才) 堤吉兵衛

『金花胡蝶幻』

初編 (明治十三(一八八〇)年、国文学研究資料館蔵 (ハ4121)) 付載広告 [図7] には、「繪本太豊記三編/隅田川月梅

若四編/太閣記切附本品々/都々逸など切付」とあり、大西庄之助の廣告にみられたように、都々逸やなぞなどの実録ではない題材についても「切附」と冠している。また、実録題材のなかでも「太閣記」という具体的な書名をあげている点が注目される(図a十八頁参照)。さらに、『鹿兒島戦記』三編上巻(早稲田大学図書館蔵(文庫11 A0420))付載広告[図8]には、「繪本太豊記 永島孟斎画 三編迄出版/繪本太閣記 切附本 同画/新增本西國奇談 為永春水作 同画 廿編マデ出版」とあり、永島孟斎(歌川芳虎)画『繪本太閣記』(明治初(一八六八)年頃刊)を切附本として出版していたことがわかる。このほか、『四国攻伐』(国立国会図書館蔵(特42829))付載広告[図9]には「繪本切附類品々 價

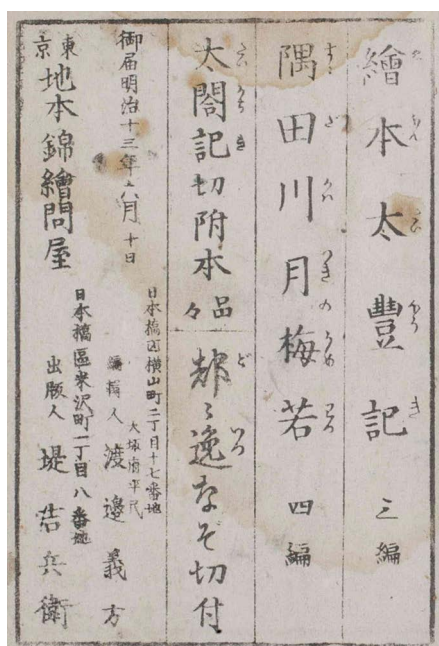


図7 加賀屋堤吉兵衛版『金花胡蝶幻』付載広告 (国文学研究資料館蔵 (ハ4121))

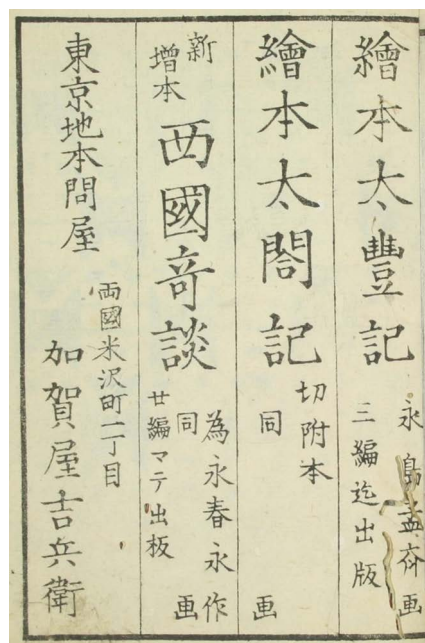


図8 加賀屋堤吉兵衛版『鹿兒島戦記』三編上巻付載広告 (早稲田大学図書館蔵 (文庫 11 A0420))

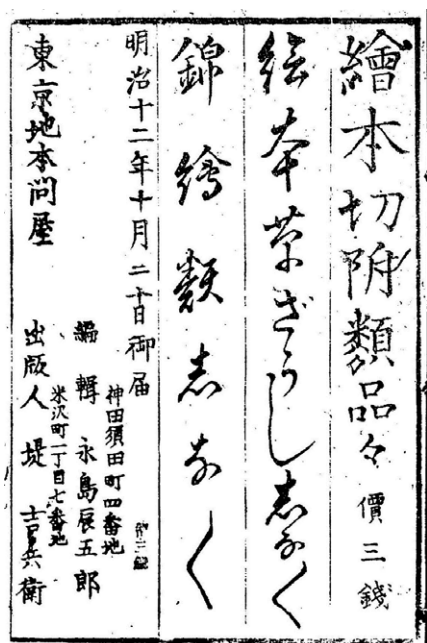


図9 加賀屋堤吉兵衛版『四国攻伐』付載広告 (国立国会図書館蔵 (特 42-829))

三銭／繪本草ざうししなく／錦繪類しなく」とあり、切附本と草双紙とを区別している。「繪本切附類品々 價三銭」という文言は入木によって補われたものであるが、切附本と草双紙との両者に何らかの認識的な差違があつたと推測される。

(九) 小林鉄次郎

『親鸞聖人御一代記』（架蔵）の巻末広告〔図10〕では、「一 東京土産故廣重画旧江戸名所五編／一 新聞新作合巻人情本類／一 昔噺小本大中小形色入墨摺類／一 切附大津繪葉唄都々逸類／一 同 新作地口謎合川柳類／一 同 白表紙往來物用文字引類／一 同 敵討一代記讀切物品々／一 同 武者其他實録物品々／…」とあり、「新聞新作合巻」と「切附」の項とを明確に区別していることは注目に値する。なお、後述するが、当時の慣習として切附表紙のものはどのようなものでも「切附本」と呼ぶ傾向にあつたことから、小林鉄次郎の広告では、大津絵節

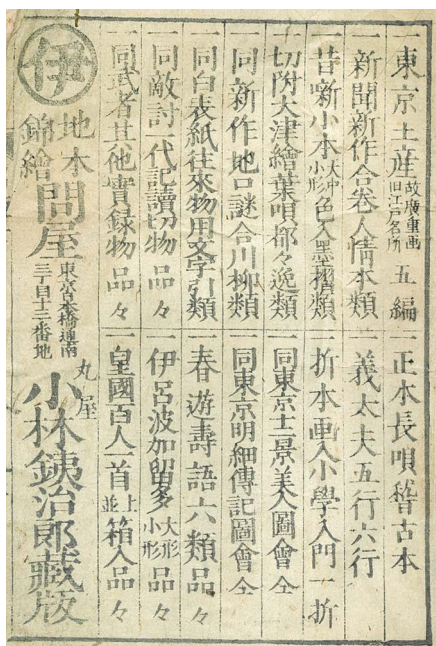


図10 丸屋小林鉄次郎版『親鸞聖人御一代記』付載広告（架蔵）

や端唄、都々逸、地口、謎合わせ、川柳、白表紙、往來物、用文字引、仇討、一代記、武者、実録物といった幅広い題材を「切附」品々として紹介している。最後二行の「切附」の項に注目すると「敵討一代記讀切物」「武者其他實録物」とあり、幕末切附本の内容的な特徴と共通する。ここまで、六書肆の広告を検討してきたが、宮田伊助や沢久次郎、長谷川園吉、森本順三郎の広告にもこれまでと同様の例が確認されたため、参考として以下に記す。

(キ) 宮田伊助

『田宮坊太郎』上巻（国立国会図書館蔵（特42884））付載広告〔図11〕には、「切付一代記物品々／全武者本るい／色いり小本類／都々一類唄本品々／…」とある。また、『かち／＼山』（国立国会図書館蔵（特60403））付載広告〔図12〕には、「太閤記甲越武者切付品々／新板上下一代記物」とあり、これまでの傾向と同様に、切附本の主要題材である

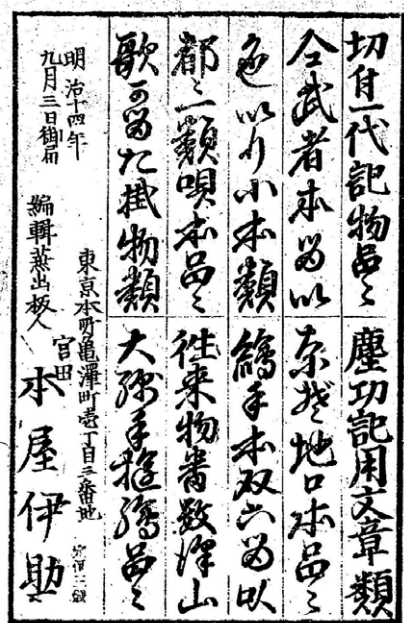


図11 本屋宮田伊助版『田宮坊太郎』上巻付載広告（国立国会図書館蔵（特42-884））

一代記物や武者物、特に具体的には太閤記物や甲越（川中島合戦関連）をあげている。

(ク) 沢久次郎

『加々見山女庭訓』（国立国会図書館蔵（特59-980））付載広告〔図13〕には「切附一代記物数品／同 はうた開化ど、一／…」とあり、『佐倉宗五郎一代記』（国立国会図書館蔵（特273-856））付載広告〔図14〕にも「切附一代記／同仇討譚／小本類品々／歌かるた数品／大津絵ぶし／はうた類／開化ど、一」とあり、一代記物と敵討物を出版している。

(ケ) 長谷川園吉

『茶番種本』（立命館大学アート・リサーチセンター蔵（arcBK05-0127））付載広告〔図15〕には、「袋入どいっはなししてじな其他しなぐ／一代記切付るる数品／色入昔咄し小本しなぐ／…」とある。さらに、明治二十年三月三日御届『京鹿子娘道成寺』（国立国会図書館蔵（特42-



図12 本屋宮田伊助版『かち / \ 山』付載広告（国立国会図書館蔵（特60-493））

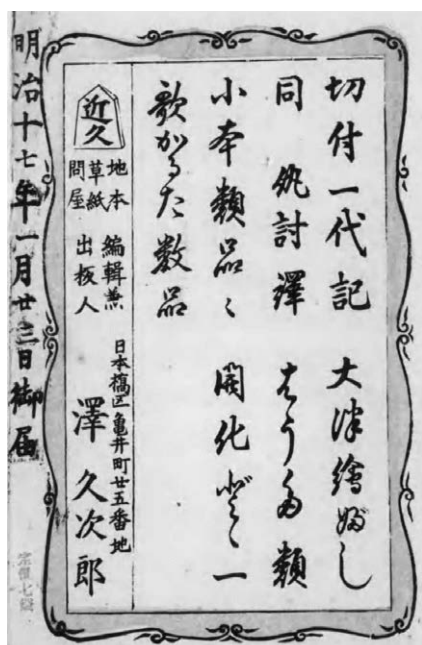


図14 沢久次郎版『佐倉宗五郎一代記』付載広告（国立国会図書館蔵（特273-856））



図13 沢久次郎版『加々見山女庭訓』付載広告（国立国会図書館蔵（特59-980））

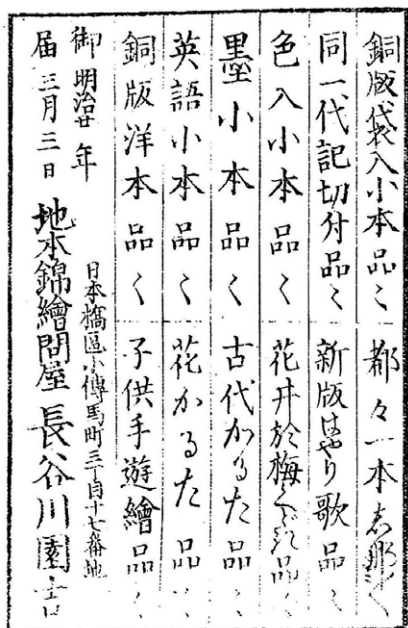


図 16 長谷川園吉版『京鹿子娘道成寺』付載広告 (国立国会図書館蔵 (特 42-943))

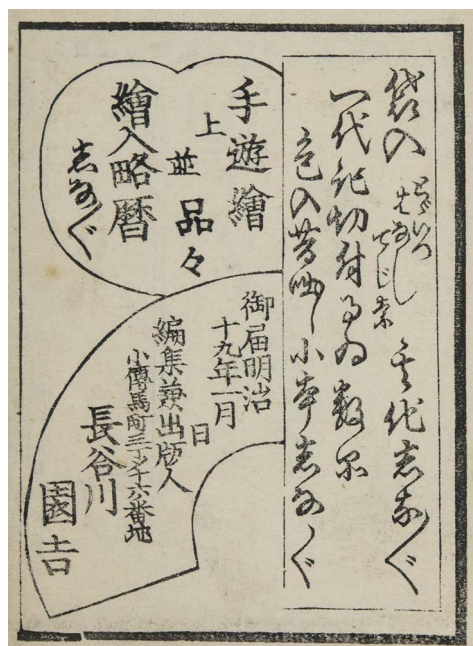


図 15 長谷川園吉版『茶番種本』付載広告 (立命館大学アート・リサーチセンター蔵 (arcBK05-0127))

923) 付載広告〔図16〕には、「銅版袋入小本品々／同一代記切付品々／…」とあり、明治二十年頃からは銅版の切附本が木版に替わって出版されている。

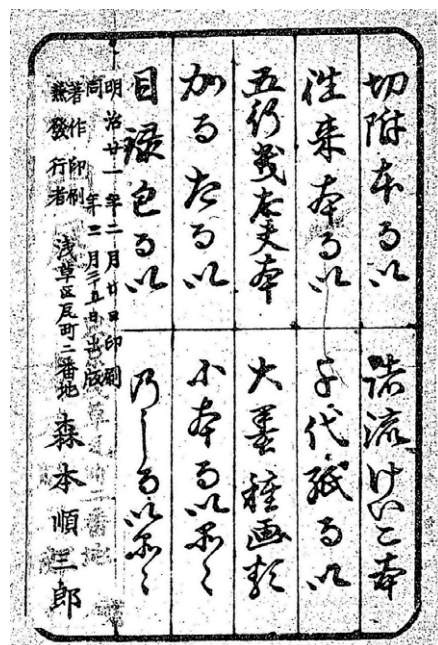


図 17 森本順三郎版『煙草屋喜八伝』付載広告 (国立国会図書館蔵 (特 59-920))

(三) 森本順三郎

『煙草屋喜八伝』(国立国会図書館蔵(特59-920))付載広告〔図17〕には、「切附本るい／往来本るい／五行義太夫本／かるたるい／…」とある。これまで見てきたように、ここである「切附本るい」は、おそらく実録種の切附本のことであろう。

ここまで、明治十〜二十年頃の草双紙類に付されている巻末広告から用例を拾ってきたが、「切附」という語が地本問屋の広告に頻出することが確認できる。また、管見の限りでは幕末期の巻末広告よりも用例が多くみられた。

次に、(ア)〜(コ)の計十書肆の広告にみられる「切附」の用例をまとめると、それぞれ次の題材に対して「切附」と称していることが分かる。

- (ア) 杉浦朝次郎↓武者、一代記
- (イ) 網島亀吉↓武者
- (ウ) 辻岡文助↓一代記、真録・実録物、武者

- (エ) 大西庄之助↓一代記、端唄、大津絵、都々逸
- (オ) 堤吉兵衛↓太閤記、都々逸、なぞなど
- (カ) 小林鉄次郎↓大津絵節、端唄、都々逸、地口、謎合、川柳、白表紙往来物、用字字引、敵討・一代記・読切物、武者・実録物
- (キ) 宮田伊助↓一代記、武者、太閤記、甲越
- (ク) 沢久次郎↓一代記、仇討、端唄、開化都々逸
- (ケ) 長谷川園吉↓一代記
- (コ) 森本順三郎↓「切附本るい」※題材の指定無し

用例を一瞥してわかるとおり、明治期の切附本は一代記・武者(敵討)・軍記等の実録を題材とする読み物であるという共通認識が地本問屋に見受けられる。具体的にどのような書目が出版されたのであろうか。大西庄之助版『小栗半官一代記』初編(国文学研究資料館蔵(ナ44861))付載広告では次のように書名を列記している。

- 梅加賀金澤實記 二冊／嘉永水滸國定忠次実傳 六冊
- 田宮坊太郎一代記 二冊／慶安正録 由井正雪一代記 二冊
- 堀部安兵衛三度之仇討 二冊／敵討亀山實記 二冊
- 復讐殿下茶屋聚 二冊／天保水滸傳 二冊
- 敵討白石噺 二冊／笹野權三一代記 二冊
- 成田利生相撲仇討 二冊／實説朝貞日記 二冊

このほか、明治期の切附本の書目は、国立国会図書館『明治期刊行図書目録』第四卷(一九七三年)文学の部「絵本」の項やデータベースでおおよその全体像を把握できる。その主要な題材は一代記や敵討等の実録であり、それぞれの本屋が同趣の作品を刊行している。多いものでは大西庄之助一〇九冊、沢久次郎八〇冊、荒川吉五郎六四冊、辻岡文助

五一冊が確認され、数年の間に次々と出版している。

ところで、切附本に該当する読み物を例外的な呼び方で表す場合もあったようである。例えば、山口屋藤兵衛版『辻占都々一』(国立国会図書館蔵(特43263))の付載広告(図18)では「袋入三冊讀切美本太閤記類種々／袋入三冊讀切美本復讐并二實録物各品／上下二冊讀切美本軍談復讐實録一代記数種」とあり、切附本に相当する商品に対して「袋入三冊讀切美本」や「上下二冊讀切美本」という語を用いている。また、小林鉄次郎版『五人殲苦魔物語』(国文学研究資料館蔵(鈴木本))付載広告には「草双紙類一代記讀切本類品々」とあり、読切本という言葉の方がでてくる。ここでいう「讀切」という形態的特徴は、切附本の商品紹介としてよく用いられる文言であり、前掲の丸屋小林鉄次郎版『親鸞聖人御一代記』に「同(切附) 敵討一代記讀切物品々」とあることから、小林鉄次郎のいう「一代記讀切本」は、つまり切附本のことであると考えられる。

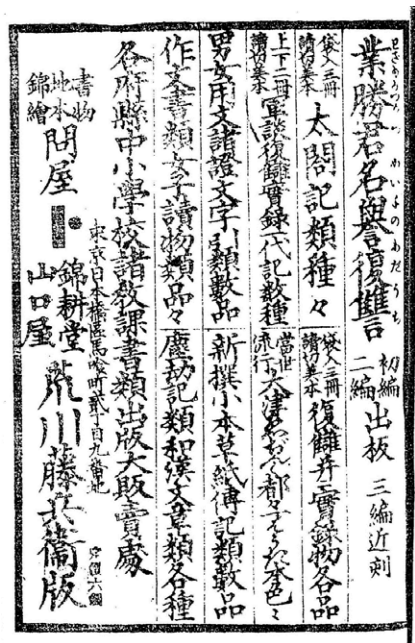


図18 山口屋荒川藤兵衛版『辻占都々一』付載広告(国立国会図書館蔵(特43-263))

二. 形態的特徴

つづいて、明治期の巻末広告にみられる「切附」の用例と実物とを照合させ、形態的特徴を検討したい。

まずは、幕末切附本の造本様式と版面の特徴について触れておきたい。藤岡屋慶次郎版『庭訓往来』（万延新刻、国文学研究資料館蔵（鈴木本））の巻末広告に、「かたきょうち 讐討類 ○ 物語類 ○ 一代記物 / 此書は凡五十枚壹冊讀切物品々明細早分かりしなく」とあるように、嘉永・安政期頃の切附本は、中本一冊読切五十〜六十丁程度を基本的な形態とする。しかし、一概に切附本と言っても例外的な様式もあり、どこまでを切附本として捉えるかを判断するのは案外難しい。表紙に関して言及すると、切附本は切附表紙に由来する名称であるが、実際は、①摺附表紙（切附表紙）、②摺附表紙（共紙表紙、袋綴じ）、③折込表紙（四周を折り込んだ表紙に短冊形題簽、袋あり）、といった具合に三種の表紙が確認できる。③のような袋入りの特製本は、手間のかかる製本方法を用いることで本としての格調を高めているのだから切附本の原義やその特性からは離れている。こうした、切附本にみられる表紙と版面との特徴を合理的にまとめたものとしては、康志賢氏の提唱する分類が挙げられる。康氏は、読本と合巻とに通じるジャンルを「切附本類」としたうえで、①切附本（↓読本と合巻の折衷、摺附表紙）、②袋入本（↓読本風、無地の表紙に短冊形題簽）、③全丁絵入りの切附本（↓合巻風、全丁絵入り、摺附表紙）、④銘々伝絵本（↓全丁絵入り、筋なし）に分類されている⁽⁷⁾。「④銘々伝絵本」の切附本とは、各丁に人物の略歴とその肖像を描いた銘々伝形式の絵本のこと、義士銘々伝や英雄百人一首といったものが該当する。こうした絵本類も切附本に準じる様式として確認されるが、内容的には絵を主体とする類聚的なものであるため、切附本に含めるか否かの判断に困ることがある。

また、石川了氏は草双紙『松浦船水棹婦言』に施された版木の改竄を

分析し、蔦屋吉蔵の事業戦略による安直な草双紙改竄本を、「草双紙型切附本」とでも呼ぶべきものであることを指摘している⁽⁸⁾。

明治期に近づくにつれ増加する傾向にあるという③「筆者注…本文は漢字仮名交じりで、全丁にある挿絵すべてに本文が入り込む切附本」は、本文を仮名書きにすればもはや合巻同様の様式であり、合巻と異なるのは五丁一巻の意識がないことだけになる。となると、本文仮名書きで同じく五丁一巻の意識がなく、しかも読本を抄録した『水棹婦言』はどう扱えばよいのであろう。私見ではやはり切附本に加えるべきだと考える。

高木氏は石川氏による草双紙改竄本の実態報告を重要とした上で、「基本的には、切附本を中本型読本の流れの中で把握したい」と丁寧に断りを入れ、「もちろん、切附本は中本型読本と草双紙との折衷様式として作成されたのであるから明確な峻別は困難」であると述べている⁽⁹⁾。いずれにしても、切附本は草双紙との親和性が高いことがうかがえる。

以上のような形態的特徴を踏まえて、明治十年〜二十年頃に出版した木版の切附本のうち、「上一代記」「実録物」「読切」といった用語に当てはまる出版物を、現時点で確認した(ア)〜(ク)(ケ・コは未調査)の版元から一例を挙げる(すべて国文学研究資料館蔵)。

(ア) 杉浦朝次郎版『慶安太平記／正雪一代記』下巻一冊、和装木版摺附表紙（袋綴じ）、十八丁、歌川国松画、明治十四年御届、国文学研究資料館蔵（ハ488）。

(イ) 網島亀吉版『敵討岩見重太郎』上下巻二冊、和装木版摺附表紙（切付）、各冊十丁、歌川国松画、明治十四年御届、国文学研究資料館蔵（ナ44701）。

(ウ) 辻岡文助版『慶安太平記正雪一代記』上下巻二冊、和装木版摺付表紙(切付)、各冊九丁、明治十五年頃刊、国文研蔵(鈴木本)。

(エ) 大西庄之助版『堀部安兵衛一代記(堀部安兵衛三度之仇討)』上下巻二冊、和装木版摺付表紙(切付)、各冊十丁、大西庄之助編集・孟齋芳虎画、明治十三年十一月四日御届、国文研蔵(ハ4 107 1-2)、〔図b十八頁参照〕。

(オ) 堤吉兵衛版『大評定伊達実説』上下巻二冊、和装木版摺付表紙(切付)、各冊十丁、山村清助編、明治十五年刊、国文研蔵(鈴木本)。

(カ) 小林鉄次郎版『慶安太平記/正雪一代記』初・二編、全二冊、和装木版摺付表紙(切付)、各冊十七丁、五雲亭貞秀作画、国文研蔵(ハ4 171)。

(キ) 宮田伊助版『笠松峠鬼人於松伝』上下巻二冊、和装木版摺付表紙(切付)、全二十丁、明治十五年頃刊、国文研蔵(ハ4 105 1-2)。

(ク) 沢久次郎版『佐倉宗吾郎一代記』下巻一冊、和装木版摺付表紙(切付)、九丁、梅堂国政画、明治二年刊、国文研蔵(鈴木本)。

これらの実録種の切附本は上下巻二冊読切で全丁絵入り、一冊の丁数は九丁及び十丁を基本とし、いずれも鮮やかな赤や紫色が目立つ摺付表紙(切付)で、刺激的な色彩で注意を引く〔図b十八頁参照〕。また本文は、漢字仮名交じりふりがな付き、挿絵の周囲に本文が入り込むという版面様式を持つ。

もちろん、明治期に中本型読本風の切附本が出版されなくなったわけではなく、和田定節編『豊臣三代記』(児玉弥吉版、明治十四(一八八二)年)のような、無地の表紙に短冊形題簽を持つ袋入本が確認される。しかし、数量的には草双紙体裁の切附本が圧倒的に多い。また、明治八

(一八七五)年出版条例第二条では、版權免許を取得していない本は一般に出版することが可能であったため、他人が無断で翻刻本(ここでは、既刊の書籍と同じもの、或いは類似のもの)を出版することができた。明治期の切附本はほとんどが無版權であり、出版が容易であったということも制作点数の増加につながったと考えられる。

ところで、制作側にとって明治期の切附本はどのような商品として認識されていたのだろうか。明治期の浮世絵師との交流があった文筆家の菱花生は、「切付合巻といふ極安もの草双紙がある、追々この切付物を繪草紙屋に頼みてか、して貰うのだ」と証言している⁽⁹⁾。ここで登場する「切付合巻」という呼び方は、管見の限りでは明治期の浮世絵師に関する証言にみられ、「切付合巻」を後から「切付物」と言い換えていることから、切附本と同義であったと考えられる。また、浮世絵師の修業について述べた樋口二葉は、「合巻即ち草双紙もの」と「俗に切附合巻と云ふ戦争もの、主となつてある柁四つ切の玩弄本」とを区別して述べている⁽¹⁰⁾。さらに二葉は具体的に言い換えて、「草双紙類田舎源氏とか白縫物語とか云ふやうな合巻もの」と「俗に切附合巻と称する玩弄の赤本」とを区別して述べている。二葉が「玩弄の赤本」と言及しているのとおり、明治期の切附本は子ども向けの玩具絵本であり、絵師の視点からみると、近世の流れを汲む「合巻(草双紙)」と玩具本に類する「切附合巻(切附本)」とは絵の重要度で異なる商品であったことがうかがえる。また、修業の身の浮世絵師にとって切附本は、生活の糧となる仕事の一つであった。切附本の主要題材である一代記や敵討等の実録物は近世期から何度も趣向を変えて出版されてきた内容であり、本文・挿絵の両方で参照に適した種本も多い。切附本『太閤記銘々伝』(綱島亀吉版、明治十一年頃(一八七八))の挿絵が、切附本『真柴軍功記』(文久堂版、慶応元年(一八六五))の武者画像を多用しているように、その場にはまりそうな画を寄せ集めて描いていたといわれる当時の三流絵師たちが

取り組む題材として実録物は適していたと考えられる。

前掲の堤吉兵衛や小林鉄次郎の巻末広告において、合巻（草双紙）と切附本とを区別して表記している。版元の視点からも、明治期における合巻（草双紙）と切附本とは異なるジャンルの商品として認識されていたことが推測される。これについては、別に稿を改めて考察したい。

三・明治二十年以降の「切附」という語の広がり

明治十～二十年頃の地本問屋の広告では、実録題材で草双紙体裁の小冊子を「切附本」として紹介するものが特に多くみられた。ところが、明治二十年以降は広告などに「切附本」という語を掲げるものが顕著に減っており、さまざまな用例を通して検討することが難しい。そこで、広告に代わって主に本屋による回想記から用例を取り上げ、「切附本」という語が示す対象の変化について注目する。

まず、明治十～二十年頃の出版界を回想した証言類を通して、文字通り「切附表紙の本」といった意味で「切附本」という語がどのような出版物を指していたのかを検討したい。朝野書店の朝野蝸牛は『江戸絵から書物まで』のなかで次のように証言している⁽¹²⁾。

歌本類は維新前より明治に涉り墨一篇の絵表紙駿河半紙二つ切（四六版）切付二三枚ものにて流行歌新作ものを中橋の松坂屋、浅草の品川屋浅次郎、馬喰町三丁目吉田屋小吉等主として出版し。香具師が夜に入り背に提灯をさし読売し縁日又は田舎の高町にて読売す。今も残り居るは鈴木主水などその類なり。

明治十～二十年頃の巻末広告を検討した際、音曲関連の書を「切付もの」として掲げる例を確認したが、ここでは墨摺りの絵表紙を備えた薄物の歌本に言及している。

一方で蝸牛は、「小説類は地佐子と称い音羽摺の薄もの政判四つ切で絵表紙安もの、一ノ切付二ノ切付三ノ切付と云ふ」と述べており、「切付もの」には一・二・三ノ切付の各種があったことを紹介している⁽¹³⁾。また蝸牛は、二ノ切付の一例として『花井於梅粹月奇聞』を、三ノ切付は『鳥追阿松海上新話』『高橋阿伝夜又譚』『島田一郎梅雨日記』『蓆簾群馬嘶』をあげている。形態に着目すると、蝸牛が二ノ切付として例示した『花井於梅粹月奇聞』は、上下巻二冊読切、和装、表紙は木版絵表紙、本文は活版であり、三ノ切付の『鳥追阿松海上新話』は一編三冊を基準として全三編九冊読切、和装、絵表紙（切付）・本文ともに木版である。一ノ切付の具体例は不詳だが、一・二・三ノ切付という呼び方は、印刷方法や内容の相違よりも、切附表紙二冊読切を二ノ切付、三冊読切を三ノ切付といった具合に、形態的な特徴による呼称であったのではないかと推測される。

加えて、『図書月報』一九二二年三月号に掲載されているエービー生「地本の由来」では「切付もの」について次のように述べている⁽¹⁴⁾。

切付ものでは商売往来、用文章、塵劫記（算術）、歌本、道中記（旅行案内）、いろは字引、小説（二ノ切付とて二冊もので追次出版）、読切物（三ノ切付）、人情本（中本、四六版）厚紙表紙を付け中味は二十五六枚のものなど、江戸で出版する切付ものを総称して地本と云ふたものであります

エービー生の素性は不明だが、朝野蝸牛と同様に一・二・三ノ切付各種に言及しており、「小説（二ノ切付とて二冊もので追次出版）、読切物（三ノ切付）」と述べている。また、エービー生の発言によると、実用にする書物や娯楽小説類を含む地本問屋のほとんどの出版物を「切付もの」としている。拡大解釈のようにも捉えられるが、そもそも地本類をこま

かく分類して把握しようとする認識は現代的な感覚であり、当時の認識が大雑把なものであったことを知る上で貴重な証言である。

このほかに、書肆達磨屋の岩本米太郎は『紙魚の昔がたり』のなかで上田屋（覚張栄三郎）について、「あの人は地本屋、即ち切付本の小説本屋でした」と回想しているが⁽¹⁵⁾、ここでいう切付本とは切付表紙の出版物全般を指していると考えてよいだろう。このように、草双紙体裁の切付本に限らず、「切付表紙の本」をひとまとめにした呼称として切付物（切付本）という語が地本問屋周辺で用いられ、一・二・三ノ切付の各種に分類されていたことが分かる。

次に、明治二十年以降に、「切付本」という語の対象が変化する契機となった事象を取り上げ、「切付本」の語義が拡大した可能性を指摘したい。

一つ目の契機は、雑誌出版の隆盛である。明治十年代から廉価な雑誌が紙クルミ装で量産されはじめ、明治二十年には「雑誌の流行」の時代へと移行する⁽¹⁶⁾。外形的特徴から考えると、表紙の三方にチリがない雑誌の形態は切付本の製本方法の一種に数えられる。紙クルミ装のような洋装製本が安価な出版物に多用されるようになると、巻末広告などでわざわざ切付表紙を備えた安価な読み物であることを謳う必要がなくなっただけではないか。

二つ目は、明治二十年以降に次々と刊行された講談本の出版である。雑誌と同じように、講談本の表紙は切付表紙クルミ装であることが多い。『文芸倶楽部』第十八巻十五号（明治四十五（一九一二年十一月）掲載の雑文「遊女と貸本」の中で白水楼は、貸本屋が「一冊読切（日限には際限はない）切りつけ物（と云ふのは講談、或ひは紙表紙の事である）を一回三銭に、クロス（小説本）を五銭宛に貸し」ていたと証言している。ここでいう講談題材の切付物とは、当時の手軽な読み物として普及した講談本のことを指している。

最後に、参考として昭和前期の辞典の記述を引用したい。『書物語辞典』（古典社、一九三九年）の「切付本」の項では、「切付本」の形態的な特徴を次のように説明する。同様の用語解説は、小林鶯里『出版の実際知識』（文芸社、一九三二年、一一八頁）や植村長三郎『書誌学辞典』（教育図書、一九四二年、一三五頁）、艷本研究刊行会編『世界艷本大集成』（緑園書房、一九五九年、六〇一頁）のような、昭和前期の文献に確認された。

明治初期の赤本の一つ、五葉六葉の本を多く重ねて仮綴にして背にのりをくれ一冊の厚本の如く見えるが、客の求めによりどの部分でも割き取つて上被ひに表紙をつけてクルミにして売る。一ノ切付、二ノ切付、三ノ切付の各種あり。

これらの記述が何に拠るものかは不明だが、切付本に一・二・三ノ切付の各種があることは、先述したとおり朝野蝸牛が言及している。興味深い点は、五、六丁の綴本を数種取り交ぜて仮綴にしたあと、背にのりを用いて紙でくるむという仮製本の特徴を示していることであり、ここでいう切付本は切付表紙クルミ装の洋装簡易製本を指していることがわかる。該当する作例としては、鶴聲社が出版した『手当芳題／護宝奴記』（明治十五年五月／十六年五月）がある。これは、月に二・三回の頻度で、五丁程度からなる数種の翻刻を一冊に仮綴じして発行し、揃ったところで製本して出版した活字翻刻雑誌であり⁽¹⁷⁾、翻刻の対象となった戯作類は、実録、読本、滑稽本など多岐にわたる。また、『書物語辞典』では「客の求めによりどの部分でも割き取つて」販売するという、柔軟な営業スタイルについて言及している。こうした販売方法は、雑誌類の出版・販売形態を想定しているのではないだろうか。明治二十九（一八九六）年より日本館から刊行された『人情世界』は木版摺付表紙クルミ装で、一冊読切金一銭五厘という薄手の雑誌であるが、この手の雑誌は直売以

外にも売り子による行商が盛んに行われていた⁽¹⁸⁾。また、「切附本の小説本屋」であった上田屋は、明治末年頃、共成会会員の一人として、小説や講談、或いは童話などの内容の月おくれ雑誌を夜店や汽車内で販売していたという⁽¹⁹⁾。

大正十四（一九二五）年、職人の不足に伴い和本仕立の製本が困難になったことから、文部省は中等教科書の装丁を国定教科書と同じ切附表紙へ変更することを許可している。「在来和本仕立であったものが切附本として市場に出るかも知れません」⁽²⁰⁾という文言からわかるとおり、明治期の「雑誌の流行」を経た大正期の切附本はもはや和装本の一ジャンルを指す用語ではなくなったことがうかがわれる。

以上のように、明治二十年頃を境に旧来の地本の出版機構が消滅に向かうなかで、雑誌や講談本を含む近代赤本の出版拡大に伴って、切附本が洋装製本を意味する名称として語義が拡大していった可能性を提示できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では明治十〜二十年頃の地本問屋の巻末広告を通して「切附」という語の用例を調査し、明治期の切附本とは具体的に何を指しているのかを検討した。また、明治二十年以降に関しては、主に本屋の証言類を取り上げて検討し、明治〜大正にかけて、「切附本」という語義が拡大している可能性を指摘した。

明治期の草双紙類にみられる巻末広告を検討した結果、明治期の切附本は、切附表紙で作られた読み物の中でも、一代記や武者（敵討）物などの実録の筋を紹介することを主眼とした小冊子を指しているということが、各版元に共有された認識として確認された。また、その形態は鮮やかな色彩の目立つ摺附表紙で、九丁或いは十丁を基本とし、全丁絵入り、版面は挿絵の周囲に漢字仮名交じりふりがな付きの本文が書かれる

という特徴がみられる。形態的な特徴を考慮すれば、明治期の切附本は「草双紙」、或いは「合巻」と呼ぶべき一群であり、内容・造本上で様々な試行錯誤が行われた中本型読本の系譜に連なる幕末の切附本とは異なる。しかし、実録の筋を紹介する安価な読み物という点で、切附本は幕末・明治の両時代を繋ぐ共通点が見出せると考える。

明治期の切附本は、それぞれの版元が数十種、多いところでは百種程度を出版しており、その出版書目は相当数が予想され、ジャンルを形成しうる数量と特徴を有する。また、各所蔵機関のデータベース等で大まかな全体像は掴めるものの、網羅的な書誌調査は行われていない状況である。加えて、浮世絵師の証言からわかるように、明治期においても、絵の重要度で合巻と切附本とは異なる出版物であると認識されている。今後、明治期の草双紙全般を対象として、合巻と切附本との差違を検討することで、両者の関係性を改めて考察することができると考える。

注

- (1) 小田田誠二「実録体小説」『時代別日本文学史事典 近世編』、東京堂出版、一九九七年、一六七頁。
- (2) 野崎左文『かな反古』、仮名垣文三、一八九五年、二九頁。
- (3) 『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年、「切附本」の項（高木元氏執筆）。
- (4) 高木元「義勇八犬傳―解題と翻刻」『人文研究』三五号、千葉大学文学部、二〇〇六年三月、一九六頁。
- (5) 本稿では、新聞の続き物を草双紙化するという流れを示した記念碑的作品である『鳥追阿松海上新話』明治十一年刊の出版をもって、明治期合巻の発生とする。
- (6) 磯部敦「銅版草双紙考」『出版文化の明治前期 東京釋史出版社とその周辺』、ぺりかん社、二〇一二年、一二五〜一五三頁。明治期の巻末広告では、銅版草双紙のことを「銅版切附本」と表記する例があることを指摘している。

- (7) 康志賢「岳亭梁左期切附本の書誌学的研究―二代目岳亭関連著編述書目年表稿の一環として―」(『日本學報』九五、二〇一三年五月、韓國日本學會、一七五頁)。
- (8) 石川了「幕末続き物合巻と切附本―松浦船水棹婦言の場合―」(『大妻国文』二四号、一九九三年、大妻女子大学国文学会、七一頁)。
- (9) 高木元「末期の中本型読本―いわゆる(切附本)について―」(同氏『江戸読本の研究』、ぺりかん社、一九九五年、二四八頁)。
- (10) 菱花生「浮世絵師」(『文芸倶楽部』第七卷四号、博文館、一九〇一年、二〇一頁)。
- (11) 樋口二葉『日本書誌学大系三五 浮世絵と板画の研究』、青裳堂書店、一九八三年、八二頁。
- (12) 朝野蝸牛『江戸絵から書物まで』一九三四年九月。朝野蝸牛の指摘は鈴木俊幸『絵草紙屋江戸の錦絵ショップ』(平凡社、二〇一〇年、一四三―一四四頁)でも紹介されている。
- (13) 朝野蝸牛編『江戸絵から書物まで』、一九三四年、朝野文三郎、五頁。
- (14) 弥吉光長監修『図書月報』第二十卷本文篇、一九八六年、ゆまに書房、四七頁。
- (15) 反町茂雄編『紙魚の昔がたり』明治大正篇、八木書店、一九九〇年、六九頁。
- (16) 磯部敦「明治二十年―大量即製時代のはじまり」(鈴木健一『輪切りの江戸文化史―この一年に何が起こったか?』、勉強出版、二〇一八年、三三八―三六二頁)。
- (17) 高木元「江戸読本享受史の一断面―明治大正期の翻刻本について―」(『江戸読本の研究』一九九五年、ぺりかん社、三九二―三九五頁)。
- (18) 中丸宣明「草双紙のゆくえ―雑誌「人情世界」の位置」(『文学』十一・十二月号(十卷六号)、二〇〇九年、岩波書店、八五頁)。
- (19) 『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』、一九八一年、全国出版物卸商業協同組合、三九頁。
- (20) 『中等教科書協会有終史』、一九四一年、中等教科書協会、二七三頁。

二〇二三年九月二十九日 受付

二〇二三年二月七日 採択決定



図 a 加賀屋堤吉兵衛広告「太閤記切附本品々」の作例
永島福太郎編『太閤記九州軍記』二号表紙・見返・一丁表、架蔵



図 b 伊勢屋大西庄之助広告「一代記切付物しなゝ」の作例
大西庄之助編『堀部安兵衛三度の仇討 (堀部安兵衛一代記)』上下巻表紙・上巻一丁裏二丁表、
明治十三年 (一八八〇)、国文学研究資料館蔵 (ハ4 107 1-2)